

エイプリルフル

メリュー

「エイプリルフル？」

ケイタ

「俺の世界では、嘘を吐いて良い日があるんだよ」

メリュー

「普通、嘘なんて吐いていけないような気がするが」

ケイタ

「まあ、そう思うわな。でも、普通にあり得ることなだけ、これがまた」

サクラ

「ねえ、ケイタ。この食材ってどこに運べば良いの？ ティアさんどっか行っちゃってさー。もし可能なら手伝って欲しいんだけど、って何かうねうね動き出した。これ生きてるのに。クトゥルフっぽい何かなのー」

ケイタ

「落ちてくクトゥルフはそもそも架空の神話だしそもそもそれはルバート王国でしかとれない貴重な宇宙蛸だ！ いいか、その蛸はあまりに貴重だからうちでも滅多にお目にかかれないけれど、あのミルシア女王陛下が食べたいと仰せになったのでわざわざ取り寄せたんだぞ！ それがばあになると俺たちの給料一ヶ月分消滅するぞ」

サクラ

「うわ、その話聞きたくなかった！ 何というか愛しさと切なさと糸井重里って感じ！」

メリュー

「何だかキャッチコピーをたくさん作りそうな人の名前ね」

ケイタ

「メリューさんほんとうに俺たちの世界に来たこと無いんだよね。そのネタ古いしそれ理解できるの相当年齢上なんですけど」

サクラ

「そこで漫才している暇があるならさっさとこの蛸何とかしろタク野郎」

ケイタ

「承知した」

メリュー

「えーでも絡まれている姿もなかなか妖艶で良いわよ？」

サクラ

「そういう問題じゃないんです。……ああ、やっととれた。ぬるぬるがとれない……。ねえ、ケイタ、タオル持ってきてくれない？」

ケイタ

「人を何でも屋に使うんじゃない。……ああ、取りあえずタオルはこれを使え。大丈夫だ、綺麗なやつだから」

サクラ

「……ありがとう。べ、別に褒めてるわけじゃないから」
ケイタ

「はいはい。……で、メリューさん、この蛸はキッチンで良いですね？」
メリュー

「ああ、それでいいよ。ところでさっきのエイプリルフールの続きだが」
ケイタ

「はい、何でしょう」

メリュー

「お前のことが大嫌いだ。以上」

サクラ

「えっ」

ケイタ

「えっ」

ティア

「……メリューはほんと、素直じゃないんだから」

終